

# 武道（居合道）による〈心の耕し〉

中村 哲

なかむら てつ

## 1 はじめに

私が、武道に関与するきっかけは中学生時代であった。昭和 35（1960）年 4 月に入学した神戸市立飛松中学校は、神戸市内でもベスト 3 に入るほどの大規模校。生徒数が最大になった時は、私が 2 学年の時で 1 学級 55 名の 18 学級、3 学年の学級数は 22 学級、1 学年の学級数が 16 学級で、生徒数が約 3,000 人の学校であった。これほどの大規模校だったので、喫煙、万引き、喧嘩などの生徒たちの問題行動も見られたのであるが、市内では評価が高い中学校だった。その主な理由は、自然に恵まれている学校であることが指摘できる。六甲山脈西の須磨山麓に位置し、戦前の宮邸の跡地に新制中学校として建設されたので、校庭には四季を映す様々な樹木と清流もあり、自然の精気が生徒たちの心を浄化する学校環境と言えた。そして、20 代や 30 代の若い先生方が多く在籍されていたこともあり、教師と生徒の絆が、勉学、クラブ活動、日常生活を通して強かったことも挙げられる。

中学校時代は人間形成において重要な時期であり、その時期に影響を受けた

価値観が自己としての人格の中核を形成する。私の学校生活を省みる時に、中学時代に過ごした学校環境と交流できた先生の影響が人間形成の基盤であった。特に、岡山大学教育学部を卒業され、社会科担当の新任の岡邊博先生からの影響が大きかった。先生は武芸の源流とされている竹内流の担い手。竹内流は戦国時代の初期に竹内久盛によって創設され、捕手、腰之回小具足、羽手（柔術）、棒、剣法、十手、鎖鎌、槍、薙刀なども含む総合武術である。クラブではなかったが、同好会として先生から羽手（柔術）の形を教えてもらっていた。柔術の形には、突き、蹴り、投げ、絞めなどがあり、最初は生傷が絶えなかった。しかし、この稽古を通して相手と呼応する体捌きや業が決まる瞬間を味わったのである。この瞬間は、業の動きに双方の動きが合致し、自我を忘れる体験であった。この体験が、高校時代に剣道、大学時代に少林寺拳法と居合道、さらに還暦を過ぎてから弓道を始め、現在でも居合道（全日本居合道連盟の範士九段）、弓道（全日本弓道連盟四段）、剣道（全日本剣道連盟弐段）を稽古する原動力になっている。特に、大学時代に始めた居合道が私にとって心身の鍛錬を続ける中枢となる武道である。

そこで、主に居合道の業と理を踏まえて「武道による<心の耕し>」の真髓を考察したい。

## 2 居合道による<心の耕し>と業稽古

居合道を始めようになったのは、大学入学後である。高校時代に剣道で腰を痛めたので、入学時に大学でも武道を継続したいと少林寺拳法部に入部していた。しかし、昭和43年度の2学年後半から学内では70年安保闘争による学園紛争が激化し、学生運動家を核にして大学封鎖が決行されたのである。その間は、大学の授業も部活動も停止状況であった。自分なりに心の置き所を模索していた時に、市内のお寺で居合道稽古がされていることを耳にして道場を訪問した。その時に、お会いしたのが、相原勝雄先生（1899~1989）。先生は、池田勇人元総理の秘書をされていたこと、仙台藩出身で幼き頃から剣道をされ、

第1回明治神宮競技大会（1924年）にて優勝されたこと、居合道の流派は伯耆流で段位は九段とのことであった。先生は小柄だったが、その演武は品の高さを醸し出していた。稽古では、弟子たちの業の問題を指摘されるよりも良さを褒める指導であった。私は昭和50年4月に秋田大学に就職することになり、同年3月に五段を取得するまで相原先生から居合道を指導していただいた。

居合道の開祖は、天文年間（1540年）ごろに羽州村山郡舘岡在林崎村（山形県村山市大字林崎）に生誕した林崎甚助重信である。甚助は永禄年間（1560年ごろ）に林崎明神に祈願して抜刀の妙を悟り、神無想林崎流を起こした。その後、彼の高弟である田宮流開祖の田宮平兵衛重正、関口流開祖の関口弥六右衛門氏心、伯耆流開祖の片山伯耆守久安などによって全国に居合が広められたと言われている。

これらの居合の流派において、私の流派は伯耆流である。この流派の開祖は、片山伯耆守藤原久安である。久安については我が国最古の武芸列伝で、1716（享保元）年に刊行された『本朝武芸小伝』では、次のように記されている。

「片山伯耆守藤原久安は、刀術を好み、抜刀妙術を悟る。或時阿太古社に詣で精妙を得ん事を祈る。是夜貫の字を夢みる。覺て後惺然として明悟す。関白秀次公其術の精妙なるを聞き、營中に召して、其芸を学ぶ。慶長15年庚戌仲呂八日其芸を以て参内し、従五位下伯耆守に任ぜられ芳名四海に顕る。後周防に赴き、又芸州に移る。後周防において死す。」（① pp.95-96）

久安は天正三年（1575）に出生し、慶安三年（1650）に亡くなっている。同時代の武道家としては宮本武蔵（1645年没）や柳生十兵衛（1650年没）が挙げられる。文禄五年（1596）正月に京都愛宕社に参籠し、剣術の精奥を得た。そして、豊臣秀次と豊臣秀頼の剣術師範を務め、慶長15年（1610）に後陽成天皇に召されて、伯耆流の極意技「磯之波」を天覧に供した。その際に従五位下伯耆守を任ぜられ、全国に知られるようになった。豊臣家滅亡の後、元和元年（1615）に周防岩国藩主吉川広家に客分として迎えられ、岩国藩を根拠にして芸州を始め九州においても片山流剣術を指導された。久安死後においても片山家は、幕末まで吉川家の師家として任を務めた。そして、片山流剣術

に関する伝書約 60 点は、片山家八代当主片山武助によって昭和 19 年に吉川報効会に寄贈され、現在では岩国徴古館に所蔵されている。

相原先生から伯耆流の指導をしていただいた約 6 年間に、伯耆流の業 31 本（表の業 6 本、中段の業 9 本、その他の業 16 本）を稽古することができた。居合道の業は座業と立業に大別できる。伯耆流では、表の業 6 本は、すべて座業である。中段の業は、4 本が座業、5 本が立業である。その他の業は、5 本が座業、11 本が立業となっている。基本的に、表の業、中段の業、その他の業の順番で稽古年数の増加と段位の昇段に応じて業稽古がなされる。そして、五段までは表の業と中段の業の稽古に終始する。六段取得からその他の業の稽古を開始するのが通例である。なお、居合道では多くの流派があるが、すべての流派が共通しているのは、自ら相手を攻撃する業ではなく、相手の仕掛けに応じる業で構成されていることである。

このような業のカリキュラム構成を踏まえて各稽古では、師範によって各業を弟子が習得できる指導がなされる。例えば、業の中では基本形になる中段 3 本目の「追掛抜」の指導過程を取り上げる。この「追掛抜」は、「前を歩いて居る者が、後ろに向き直って斬りかかろうとするのを、急に抜き打をもってその右脇を斬り上げ、更に斬り下して倒す業である」。(②p.29) この業を師範が指導する場合には、最初に師範がこの業を演武する。弟子たちは、この師範の業演武を見ることによって業の全体像の理解を図るのである。次に、師範はこの業の一連の流れを、最初の「前を歩いて居る者が、後ろに向き直って斬りかかろうとする」動きを察知する動作、この相手の攻撃に対して「急に抜き打をもってその右脇を斬り上げ、更に斬り下して倒す」抜刀をする動作、そして、抜刀した刀を鞘に納める（納刀）動作を主にして指導する。その理由は、居合道のすべての業が、抜刀を基軸に抜刀前（察知）、抜刀、抜刀後（納刀）からなる一連の動作になっているからである。その意味では、業稽古は師範の模範演武をモデルとして、各弟子が察知、抜刀、納刀を師範の指導によって洗練する反復動作である。

特に、このような業稽古において、察知の動作では「相手の機先を制する」

こと、抜刀の動作では「斬り付け」の刀法、納刀の動作では「残心」の心構えが基本になる。「相手の機先を制する」仕方としては、①先先の先（先の先）、②先（対の先）、③後の先（待の先）がある。①先先の先は、相手が何等の仕掛けを示さないが、害があることを未然に察知して、相手の仕掛けの前に機先を制する方法である。②先（対の先）は、相手がこちらの隙をみて、刀の柄に手を掛けたり、刀を抜いたりする動作の機先を制する方法である。③後の先は、相手が既に抜刀し、切りかかるとする動作の機先を制する方法である。（③ p.26）

これらの機先を制する抜刀の方法が「切り付け」である。「切り付け」は、片手操作で次の4方法がある。①相手の顔面を上から下へ切り付ける。②相手の右肩から斜めに切り付ける。③相手の体を横から水平に切り付ける。④相手の右脇下から斜め上方に切り付ける。これらは各流派の基本型において最初に発せられる片手操作の抜刀である。前述の「追掛抜」では④相手の右脇下から斜め上方に切り付ける方法が採られている。そして、この「抜き付け」は片手操作による相手の戦意を制することが目的で、相手の命を断ち切ることはしないのである。しかし、相手がなおも攻撃を続けてきた場合には、両手操作によって相手の頭を切り裂く「斬り下ろし」によって相手を必殺するのである。

納刀の動作は、居合道の業が攻撃を掛けてきた相手を必殺するだけであれば、必要とされない。しかし、居合道では必殺直後から「納刀に移る途中、又納刀し終わったときでも始終油断のない心を残す事と姿勢、態度をくずさない心構え」としての「残心」が必須とされている。このように「残心」が、特に納刀の際に重視されるのは、「残心の構えを取る業合に位がにじみ出る」とされ、演武者の品格が醸し出される動作だからである。

このような業を修練する要訣としては、次のことが指摘される。「(1) 抜刀、納刀が極めて自然である事。(2) 業の理合いを十分に会得して、その理に基き、動作と運剣の遅速強弱を自得する事。(3) 坐作、進退、運剣の際、いかなる時と雖も自己の丹田に気力が充実して居る事。(4) 抜き打ちから最後の勝（斬下し又は打下し）をつける迄、その運剣は少しも渋滞（止まる）してはならぬ。

(5) 残心を忘れた居合道は死物である。(6) 息を吐く時心身の体は實で息を吸いこむ時の心身の体は虚なり。(7) 表の働きは、その裏の力、眼に見える所の働きは眼に見えぬものゝ力の表れである。(8) 道の修養の根幹は、表に現れぬ所に着眼して、内の正しい心の働きの完成を期する修養である。」(③ pp.29-30)これらの業の稽古においては、刀操作の技法を踏まえながら呼吸、目線、体捌き、丹田、気力、残心、心の働きなどの心身の有り様が相互関連的に縫合されるのである。したがって、居合道では基本業に基づいて構成されている型を鍛錬することによって各流派の正しい業を体得し、運剣の速度と斬撃の強さを練磨し、品格ある境地(こころ)を築き、耕することができるのである。

### 3 居合道による<こころの耕し>の「位事理」

前述したように居合道は、日本刀を抜刀することによって相手の不意の攻撃に対して、瞬時に応じて相手を制する刀法である。居合という用語は、人間が行住坐臥のいろいろな行為をする場に居ることを意味する「居」と人間が他と関わり合う様を意味する「合」によって合成されている。その意味では、剣道などの立合のように刀を抜いてから勝負する刀法とは異なる。むしろ、歩いて居る時、座って居る時、寝て居る時、あらゆる状況において臨機応変、当為即妙に対応する刀法である。しかし、その刀法は相手を殺傷する業になっているが、その業稽古を通して品格ある境地を築き上げる自己の人間形成を図る意義を有する。この意義は、居合道だけでなく、次のように武道としての共有意義でもある。

「武道は、武士道の伝統に由来する我が国で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、柔道、空手道、剣道、相撲、弓道、合気道、少林寺拳法なぎなた、銃剣道を修練して心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、国家、社会の平和と繁栄に寄与する人間形成の道である。」(日本武道協議会 平成二十年十月十日制定)

このように明記されているように武道の目的は、人間形成である。その人間

形成としては、自己の人格を磨く私の側面と国家、社会の平和と繁栄に寄与する我々の側面の関与が求められるのである。しかし、居合道も含めて武道の稽古を始める動機は、自分が強くなりたい、試合に勝ちたい、自分を鍛えたいなど私の側面の関連が 100 パーセントである。「国家、社会の平和と繁栄に寄与する」私の側面に関心を有する武道初心者は少ないと言える。

私自身も平成 20（2008）年の八段取得までは、私の側面との関連のみで居合道の意義を見出していただけであった。しかし、平成 7 年 1 月の阪神・淡路大震災や平成 23 年 3 月の東日本大震災の歴史上の社会的危機状況に直面することによって歴史的側面や社会的側面の関与を喚起されたことや居合道の業だけでなく、その業の理合や意義も視野に入れる武道論としての居合道の理の世界にも関心が誘発されてきたのである。

例えば、前述したように伯耆流も含めて居合道では抜刀を基準に業稽古がなされる。しかし、伯耆流では刀を抜いてから（已発）の技法と刀を鞘に納めた状態での（未発）の技法も含めている。この伯耆流の武道観として次の特色が指摘される。

① 「武」の字源について、一般的に「戈（ほこ）を止（と）める」と解される意味を「戈が止（や）む」と捉える。「戈を止（と）める」の捉え方は世の争乱を人為的武力の行使によって治めることを意味するのに対して、「戈が止（や）む」の捉え方は天理の道理に応じて世の争乱は治まることを意味する。その意味では、伯耆流には人間界の所作だけでなく人間界を超えた存在を重視する神武思想や天人合一の考え方が根底にある。

② 居合は争う敵を倒すことではなく、「不争ノ利」をなすことである。敵対する相手を刀によって殺傷するのではなく、「刃ヲ心ノ鞘ニ納テ」、刀を抜かない「未発の居合」を旨としている。そのような居合が「戈が止（や）む」状態（泰平）を生み出すことに通ずるのである。このように伯耆流の理念は、「敵と和し、天地万物と相和する」ことにある。（④ pp.8-9）

現在では居合道修練の目的としては、「定められたところの武技を通じて、剛健なる身体を鍛錬し、己が精神の錬磨をなすにあり。換言すればその根本とす

るところは、いわゆる武徳修養の一点に帰す」(③p.10)と述べられているように、居合道の修練によって健全な身体と精神の形成が目的とされている。この人間形成を図る上で、居合道は他の武道や芸道とも共通する方法として、「心、気、力、剣、体一如の心技を修業する」ことが大切とされる。すなわち、居合道においては刀法の業の修練によって心と体の統一を図ることが人間形成の基盤になるのである。そして、居合道だけでなく他の武道も、芸道も含めて貫道する理は心技体の体得であると言える。さらに、この心技体の体得の世界を伯耆流の「未発の居合」と「不争ノ利」の理の考え方(理論)では人間界だけではなく動植物界も包含する神、天、天地万物などの無限なる世界との合一や融合の関わりが示唆されている。

さらに、このような理の世界についての覚知は、業稽古の事(実践)と遊離して体系づけられるのではなく、事としての業稽古と表裏一体の関係性においてなされるのである。その覚知する機会が、稽古を通して相手と呼応する体捌きや業が決まる瞬間であり、業の動きに双方の動きが合致し、自他を忘れる体験であると言える。その体験は、自然に接した時に実感できる心の純粹さと類似する。さらに、西田哲学の根源である「純粹経験」とも言える。また、絶対者と自己の関係性を「絶対矛盾的自己同一」とも説明できる。あるいは、芭蕉が『笈の小文』の序にて、自己の俳句への創作的理念を次のように述べている。

「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、その貫道する物は一(いつ)なり。しかも風雅におけるもの、造化(ざうくわ)にしたがひて四時(しいじ)を友とす。」造化とは、「天地間の万物が生滅変転して、無窮に存在していくこと」「天地を創造し、その間に存在する万物を創造、化育すること。また、それをなす者」「造物主によって造り出された森羅万象」等の意味がある。(⑤)

このように伯耆流の理とする無限なる世界との合一や融合の関わりは、武道、芸道、絵画、文芸、邦楽、芸能、宗教などを含む日本文化の基底となる理であるとも言える。

この伯耆流の理と事(実践)が融合されている伯耆流の極意とされる業が、

「磯之波」の一刀である。久安が、慶長 15 年（1610）に後陽成天皇に召されて、伯耆流の極意技「磯之波」を天覧に供した業である。「右膝を立て坐せる場合に、敵が正面より切り付けて来るのを。僅かに之を避け、其の脇腹を下より切り上げ、続いて立上がりて真っ向より摺り斬り流す動作なり。」（③ p.11）

この業は、「その他の業」に属し、先に説明した「追掛抜」が立業であるのに対して座業であり、抜刀は下からの切り付けから、直ぐに立ち上がり、切り下す動作である。その意味では、伯耆流の業としては、基本形になる。そして、伯耆流の表の業、中段の業、其の他の業の名称は、「押え抜」「小手切」「膝詰」「返り抜」「切先返し」などのように抜刀動作に由来する業が多いのであるが、この業名は、「磯之波」というように自然現象名になっている。そして、この業の妙が次のように述べられている。（⑥ p.40）

「磯之波」の真理は到底筆舌に尽くすべきに非ず、又行って体得すべきものにして、論じて知るべきものでもない。されど其の名称によって、心理の片鱗を云はば、おほらかに、ゆるやかにあるが如くなきが如くにうねる沖の波が、磯辺に押し寄せるに従って其の姿を現はし、愈々磯にかかれば何物をも流し去り、奪い去って、後には一物をも止めず、再びゆるやかに沖へ帰へる姿か。

業の動作が、自然現象の磯の波に同化する内容になっているのである。その意味でも、伯耆流の事（実践）と理（理論）が融合されている極意の業である。さらに、伯耆流では事と理の融合を通して生み出される世界が位とされるのである。「位は特に大切な修行目標の一にして幾多の修練を積み重ねた結果自然に身にそこなわってくる品格の威力にて刀技理合に適い、心技自然に適いなば自ら位が生まれいずるものにして唯求めても得られず。」（⑥ p.53）

このように居合道の 1 流派である伯耆流であるが、根底となる「位事理」の教えは、日常生活も含めて私たちの人間社会だけでなく動植物も包含する地球世界も視野にひとつの存在としての心の耕しを可能とする指針であると言える。

#### 4 おわりに

本小論では、居合道の武道による〈心の耕し〉を、居合道における事として

の業稽古と居合道における理としての位事理に基づいて考察してきたのである。居合道を含む武道による心の耕しは、事としての業の稽古を通して、理としての業の理合を感得し、その事理融合の業修練によって自然に醸し出される位(品格)の熟成である。さらに、その位は、自分たちの日常生活を含めた人間社会だけでなく動植物も包含する地球世界も視野にひとつの存在としての心の耕しを可能とする指針になる意義がある。

なお、中学校時代に柔術稽古をした竹内流開祖である竹内久盛は、大学時代から居合道稽古を始めた伯耆流開祖の片山久安と、異母兄弟であると言われていた。このことを知ったのは、還暦を過ぎた頃である。私が、竹内流柔術と伯耆流居合道の稽古をするようになったのは、岡邊先生と相原先生との昭和時代の出会いであった。約 500 年前に生み出された武道(居合道)による「位事理」としての<心の耕し>の真髄は、竹内流柔術と伯耆流居合道の開祖が異母兄弟の関係であったことを知るにより、時間空間を超えた脈絡として継承・持続されることを覚知したのである。

## 引用文献

- ① 日夏繁高『本朝武芸小伝』第日本武徳会本部 大正 9 年。
- ② 広島剣友会編『伯耆流居合道教書』広島剣友会 昭和 50 年 5 月
- ③ 中村哲編『伯耆流相原勝雄範士居合道要訣抜書』伯耆流居合道研究会 平成 13 年 5 月
- ④ 片山久隆『弊帚自臨傳』正保四年(1647年)巻一
- ⑤ 「松尾芭蕉『笈の小文』の朗読」<https://mukei-r.net/poem-basyou/oino-kobumi.htm>。
- ⑥ 伯耆流居合道研究会済寧館道場(浅田幸一)編『片山伯耆流居合 弊帚自臨伝』伯耆流居合道研究会 平成 9 年 5 月

## 参考文献

- ① 拙稿「武道場育の意義と展望」『國學院大學人間開発学研究』第 3 号 平成 24 年 2 月
- ② 拙稿「武道における<こころ>の鍛錬と武道教育の意義」人間教育研究協議会編『教育フォーラム<こころ>を育てる』47 号 金子書房 平成 23 年 2 月
- ③ 中村哲編『和文化 日本の伝統を体感する QA 事典』明治図書 平成 16 年 10 月